

月刊 地域支え合い情報

[2018年7月20日発行]

本体 286円+税

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



里山の間伐作業 (特定非営利活動法人吉里吉里国/詳しくは7頁へ)

特集

農林水産業と ともに育つ

- 手を取り合って水産業とまちの再生・発展を ③
漁業生産組合浜人 (宮城県石巻市)
- 北限のオリーブをまちと復興のシンボルに ⑤
一般社団法人雄勝花物語 (宮城県石巻市)
- 豊かな里山の暮らしを見つめ直して ⑦
特定非営利活動法人吉里吉里国 (岩手県大槌町)

まじわる災害公営住宅⑨ ⑨
ございんの会 (宮城県亶理町)

仮設住宅のいま⑩ ⑩
宮城県女川町

どこでもサロン⑫ ⑫
音別ふき落団 (北海道釧路市)
おうちサロン (滋賀県米原市)

被災経験地からのメッセージ⑭ ⑭
川根振興協議会 (広島県安芸高田市)

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮

東北の元気⑯ ⑯
健康麻雀愛好会 (宮城県松島町)

☆専門家に聞く地域づくりのヒント
(十文字学園女子大学 人間生活学部 教授 佐藤 陽さん)

「農林水産業とともに育つ」



四方を海に囲まれ、国土の約7割が山地や丘陵地で、季節の変化に富んだ日本は、豊かな自然から恵みをもって、暮らしてきました。

農業・林業・水産業などの一次産業は、私たちの暮らしの根幹を支えてきた産業といえます。

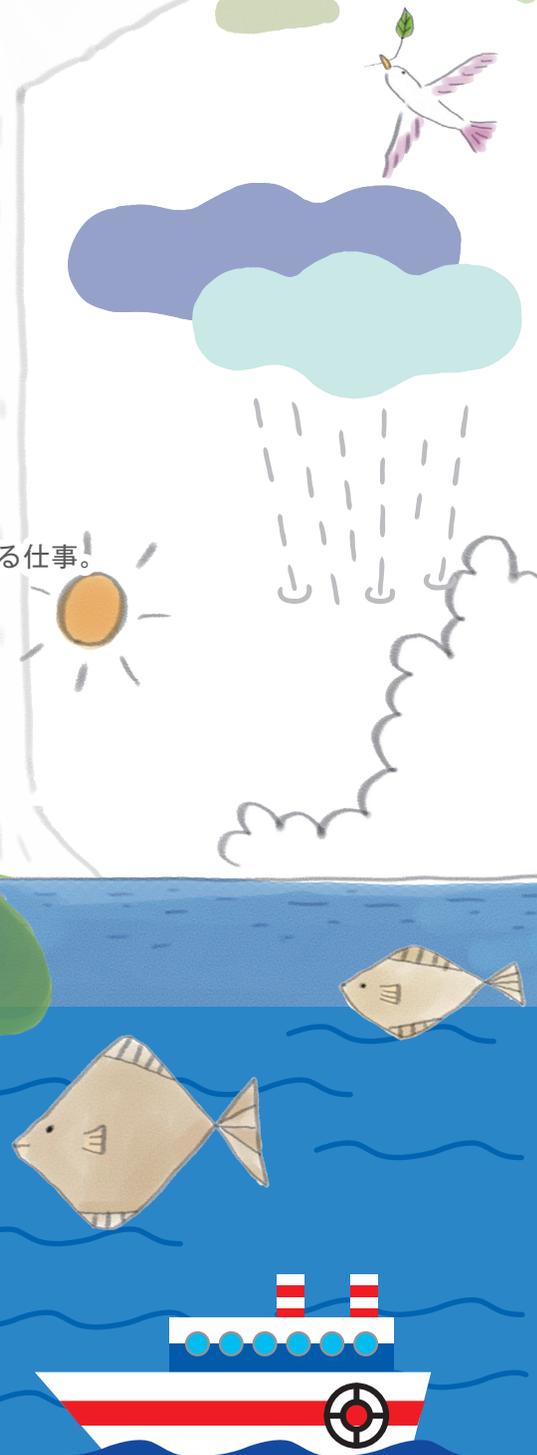
自然を肌で感じられ、生きものの命に直にふれる仕事。
(ときに自然はままならぬこともあります。) 自分の技量と努力が反映される仕事。
「生きること」に直接貢献できる仕事。
多くの人たちがやりがいと誇りをもって、産業を担っています。

しかし、少子高齢化などの影響もあり、産業の担い手は減少しています。
2011年の東日本大震災も、そうした傾向に拍車をかけました。

一方で、被災地から新たな産業の取り組みも生まれ、地域の未来に、希望の光をもたらしています。

産業活動を通じて、地域の可能性を掘りおこし、地域を元気にする。
地域、産業に新しい価値観と展開を生み出す。
同業者や異業種の団体とのつながりを広げていく。
生産者と消費者の断絶をつなぎ直す。
地域内外の関心呼びおこし、次の担い手も育む。

地域の実情、産業の実態にあわせた、それぞれのアプローチがとられていますが、いずれの団体も、産業の復旧から、そこにとどまらない、震災前以上の産業発展、地域の活性化も見据えた活動を行っています。





ワカメの収穫の様子

DATA

漁業生産組合浜人
(代表者 西條 剛)

〒986-0201
宮城県石巻市北上町十三浜大指16
TEL 0225-66-2071
URL <https://www.hamanto.com/>

手を取り合って水産業とまちの再生・発展を

◎漁業生産組合浜人^{はまんと}(宮城県石巻市)

ポイント

- 資源を共有し、助け合うことから産業の復旧につなげる
- 水産業の担い手づくりには、魅力を増やすことと次の世代に伝えることが大事。そのためには、民間・地域レベルから波及させること

2011年3月11日。東日本大震災の津波被害により、北上町は壊滅的な打撃を受ける。養殖施設は全壊。加工場、漁船は9割全壊したが、なかには、加工場が高台にあって損壊を免れた人や、津波が来る前に船を沖に逃がすことができた人もいた。残った資源

分ち合い、立ち向かう

宮城県石巻市北上町十三浜は、北上川の淡水と太平洋の海水がまじわる恵まれた漁場にあつて日本有数の海藻の産地として名高い。「漁業生産組合浜人^{はまんと}」は、北上町の漁家5家族、総勢15人による生産法人だ。震災後に、相互の助け合いの目的で生まれた。給料制で共同作業を行い、ワカメ・昆布・帆立の養殖から茹であげ、塩蔵、加工、販売までの全工程を手がけている。ほかに、ネットでの直接販売などの新たな販路開拓や企業と組んでの商品パッケージの共同開発も行う。さらに、漁業体験の受け入れや学校教育にも力を入れる。

「自分たちで売る」発想

売上をあげるには、「数量×単価」をあげなければいけない。しかし、水揚量を増やすには限度がある。全自動化はできないし、ひとりでつくれる量には限界があるからだ。では、単価

を皆で共有して仕事ができないか。震災前から親交が深い5家族で話し合いがもたれた。そして、同年10月、浜人が設立される。組合員は、「現状が困難だから、手を取り合ってやろう」というところからのスタートでした」と振り返る。復旧を目指し、町民は共同でガレキ撤去作業から始めた。それから、浜人結成前後の9月から11月にかけて、ワカメの種を海に浮かべて収穫に備えた。翌年3・4月には、前年比約7割の収穫量だが、利益をあげることできた。漁師たちは、生活の糧はもちろん、機材購入や自宅再建にあてた借金も返済していかねればいけない。ワカメは短期間で育ち出荷できるため、重宝された。

漁業生産組合浜人 理事
／ 一般社団法人フィッシャーマン・ジャパン 代表理事

阿部勝太さん

「あれだけのことがあっても立ちあがったわけだから。再開して良かったなど最終的に思える形までもっていかないと。震災のマイナスを少しでもプラスに変えられるような取り組みを考えてやらなきゃいけない」

はどうか。これまでの入札制度では、買手が値段を決めており、その年によって変動もあった。生産者が価格交渉に関与するために、スーパーに「自分で売る」発想に行き着く。生産から販売までの過程を生産者が担う、いわゆる6次産業化が、たどり着いた答えだった。

PRやブランド化、クレーン対応まで自分たちで行わなければいけなかったが、メリットも大きかった。漁業者が売り場に立つことで商品の魅力をより具体的に説明できるし、生産者の顔が見えることで消費者に安心感を与える。良いものをつくれれば高く売れるし、見合った対価を得ることでやりがいにつながる。結果として、価格を高値で安定させることができた。

生産組合化したことで、作業効率の低下などクリアしなければいけない課題もあった。それでも、6次産業化は個人ではできなかったことであり、何より「同じ釜の飯を食う仲」として一体となった心強さがある。

被災地から水産業の未来へ

こうした新たな試みに、はじめは肯定的な意見ばかりではなかったが、結果が目に見えて出て、認めてくれる人も増えてきた。「地域に少しは新しい風を入れられたと思う」と話す理事の阿部勝太さん（32歳）は、代々のワカメ漁家の生まれで、浜人では営業担当として活躍する。

「上の世代は、ものづくりの考え方がベースにある人が多い。そこに、比較的经验が短いぶん頭も柔らかい自分が、法人運営のビジョンをプラスしています」

阿部さんは、一般社団法人フィッシャーマン・ジャパン（以下FMJ）の代表理事でもある。浜人の活動で各地の商談会や勉強会に顔を出し、同じような問題を抱えた漁師たちと出会ったことが、契機になった。人口減少、後継者不足、水揚量低下。震災によって、将来の日本の問題が、被災三県で先行して立ち現れたといわれる。水産業全体のために何かできないかという思いから、14年に、三陸



帆立に付着したゴミを取る作業中

地域の漁師、水産団体などとFMJを設立。担い手育成や消費者と生産者との仲介、都市部と地方との橋渡しなどを行って、課題解決に当たっている。

浜人とFMJは相互に連携もとる。販路の開拓や営業面で協力するほか、FMJが石巻市から委託を受ける「水産業担い手育成事業」では、漁業体験の受け入れ先の一部を、浜人の漁師が担っている。また、同事業の一環として、浜人の漁師が地域の学校で水産業の現状と可能性を伝えている。「いまは、漁師の息子でも、海のことを知らない子も多い。まずは、海をもっと好きになってワカメや昆布、帆立を食べてもらいたい」と阿部さんは想いを語る。

では、後継者育成のためにたいせつなことは何か。「次の世代に伝えること。それから、現場の魅力をもっとつくっていくこと。」

そのためには民間・地域だけの力では難しい。まずは小さなことから積み重ねて広げて、最終的には国をあげて盛りあげていけたら最高ですね。被災三県からそうした取り組みが増えて、大きなうねりになれば」

今年からは、浜人の組合員以外も含む、地域の若手漁師で、種づくり（養殖漁業ではない、栽培漁業）を始めた。共同の販路開拓も視野に入れる。こうした行動をおこせたのも、「浜人で積んだ経験知が大きい」と阿部さんは言う。

この先のまちや水産業のあり方も見据えている。「時代の波を察知した変化が求められる。浜人やFMJの活動を通じて、新しい価値観を入れたい。そういうやり方もあるのかと思う人が、一人でも出てくればうれしい。水産業に携わる仲間皆で、産業の底あげをしていけたら」。浜人と仲間たちの挑戦は続く。田



地域内外の人の協力を得ながら、色鮮やかな庭園づくり

DATA

一般社団法人雄勝花物語

〒986-1333

宮城県石巻市雄勝町雄勝字味噌作24-3

雄勝ローズファクトリーガーデン

TEL 090-9037-4593

北限のオリーブをまちと復興のシンボルに

◎一般社団法人雄勝花物語（宮城県石巻市）

ポイント

- 新たな特産品づくりをとおして人口減少などの地域課題の解消へ
- さまざまな個人や団体とつながりながら、復興のシンボルを育む

宮城県石巻市で、いまも巨大な堤防が建設されている、雄勝地区。高さ10m近い防潮堤が1.8kmに及ぶ計画で、その規模からも、東日本大震災当時の津波被害の大きさが伺える。

石巻市街から雄勝地区中心地が続く道沿いで、雄勝ローズファクトリーガーデンという、色鮮やかな庭園がある。運営・管理しているのは、「一般社団法人雄勝花物語」だ（本紙18号に関連記事あり）。

代表理事の徳水利枝さんが、津波の被害を受けた実家跡地に花を植えたことがはじまりで、地域内外の人と共同で庭園づくりが進められた。空き地が広がる地域で庭園が色づき、皆の心の支えにもなった。コンサートなどの催しを開いたり、いろいろな人が集い、寄り添う場にもなった。

この庭園では、年間をとおして、さまざまな作業があり、毎年、地域内外のボランティア1000人ほどが活動する。また、ここでの土・花・

人とのふれあいは、企業での職員研修や、若者支援団体による就労訓練に活用されることもある。

地域の交流人口を増やすことも、庭園のもつはたらきの1つだ。雄勝地区と接点を持ち、地域のことを知り、愛着をもってもらおうようにすることは、この地域の情報を各地に発信することにもつながる。何度か足を運ぶ人もいるし、地元で買ったものをしてもらうことも地域経済への貢献になる。

最北のオリーブ産地へ

はじめは任意団体で取り組んでいた庭園づくりは、2014年4月に法人化。徳水さんの夫の博志さんが収益事業を担当するもう一人の共同代表を務め、二人三脚で活動してきた。あるとき、「雄勝のために何かしたい」という地元出身者の声から、雄勝地区でオリーブを育てるアイデアがもちあがった。

旧約聖書にある「ノアの方舟」の物語では、主人公ノアが大洪水から身

一般社団法人雄勝花物語

共同代表 徳水博志さん

「自分らのふるさとを捨てるわけにはいかない。
苦勞してでも、ここで頑張っていきたい」



を守るために方舟で家族やそのほかの動物と過ごし、周囲の状況を調べるために放たれたハトが、オリーブの葉をくわえて戻ってきた。それによって天候が落ち着いてきたことを知り得たということから、ハトとオリーブが世界的に平和の象徴となっている。

オリーブはあたたかい地中海地方が主な産地で、日本国内では香川県が有名。最も北に位置する産地は福島県だと言われていた。石巻市内では前例がなく、栽培が可能なものなのか確証はなかったが、石巻観光協会から支援を受け、2014年に雄勝花物語のもつ農地でオリーブの試験栽培を開始。3回冬を越し、花が咲いたことから、石巻市の比較的寒冷的な気候でもオリーブが育つと判断された。

市もこの取り組みに賛同。17年1月に「石巻市北限オリーブ研究会」が立ちあげられ、博志さんが副会長を務めている。雄勝花物語のほかにも、



試行錯誤しながらたいせつに育てられているオリーブ

「農業生産法人みのり」「株式会社宮城リスタ大川」「特定非営利活動法人ジョイフル網地島」といった、市内で農業などに取り組み3組がオリーブの苗を育てる。宮城県農業改良センター、石巻専修大学、宮城大学などと協力しながら進める、産官学民一体のプロジェクトだ。

苗植えや除草、排水路の整備などはボランティアと一緒に رفتりしながら、肥料を与えたり、枝を誘引して形を整えたり、剪定したりする大事な作業は、各団体の管理者が責任をもって行う。土の質や肥料の種類・量などを研究しながら行う、土壌の改良が特に難しいという。何度か

に渡って苗を植え足して、現在は市内で約1500本の苗が育てられている。安定して実が収穫できるようになるまでには時間がかかるものの、着々と成果を出し、昨年は参画団体の全農地を合わせて4・7kgの実が収穫された。

復興の象徴とともに
まちを活性化

同研究会は、市内におけるオリーブの生産・加工・販売を手掛ける6次産業化の定着を目指している。ゆくゆくは、いまオリーブの栽培を管理している団体のほかにも生産者を増やし、より広く連携して産業を活性化させる。雄勝花物語でも、加工場を設け、ピクルスやオリーブオイルをつくって販売することを計画している。

国内最北のオリーブ生産地を確立するための挑戦は簡単ではない。それでも博志さんは、「復興に向けた取り組みは、責任感だけでもついても難

しくて、好奇心を満たしたりできないと続けられない。新しいことをやるのは楽しい」と語る。

雄勝地区はもとと漁業以外の産業が少なく、震災後、漁師は地元に残ったが、そのほかの多くの人が他地域に移り住んでしまった。漁師の子どもたちも、ほとんどが会社勤めだったため、市街地などの内陸部で生活を再建。雄勝地区の中心部の人口は、震災前の1600人からいまでは100人ほどに減少したという。地域に仕事があれば、若い人も家庭をもち、子どもを産み、育てることができると。人口減少地域での産業活性化に伴う雇用創出は、大きな可能性をもっている。

6月に行われた、いしのみき復興マラソンでは、種目ごとの優勝者にオリーブの枝葉を用いた冠が与えられた。20年に東京都で開催されるパラリンピックの表彰式で活用してもらおう構想もあり、被災地域発の夢と希望は膨らむばかりだ。



DATA

**特定非営利活動法人
吉里吉里国**

〒028-1101

岩手県大槌町吉里吉里3丁目404-44

TEL 0193-43-1018

URL <http://kirikirikoku.main.jp>E-mail info@kirikirikoku.org

吉里吉里国の薪製作場で、ボランティアとともに汗を流し活動を行う

豊かな里山の暮らしを見つめ直して

 ◎特定非営利活動法人吉里吉里国きりきりこく（岩手県大槌町）

ライター：元持幸子

ポイント

- 受け継がれてきた町の資源である里山から薪をつくり、震災後の暮らしの再建や地域産業の復活に役立てる
- 豊かな里山を守るのは、継続的な維持管理の仕組みと担い手だ。仕組みと担い手づくりには、関係機関との連携や体験活動、啓発が必要

岩手県大槌町吉里吉里地区の太平洋を望む丘に、薪がきれいに積まれている。この薪は、同地区の特定非営利活動法人吉里吉里国（以下、吉里吉里国）が手がけている。理事長の芳賀正彦さん（70歳）は、「震災前よりもさらにきれいな山と豊かな海をつくりたい」と、東日本大震災後の瓦礫廃材撤去から始め、里山の整備、薪の生産事業へと活動を展開。人材育成にも取り組む。

自然との共存を目指して

震災後の避難所では、皆で助け合い、寒さをしのぐために、瓦礫廃材より薪をつくり、焚火を囲み暖をとった。住民有志や災害ボランティアが、薪ボイラー用の薪をつくり、沸かした湯を提供した。芳賀さんは、「海辺の周りの被害を見て唖然とするなか、被害を免れた山が目に入った。暮らしを支える里山の力を感じた」と当時を語る。薪をつくり、その火を活用することは、暮らしに根づく知恵なの

だと再認識した。そこで、2011年11月、住民有志と吉里吉里国を設立。町に残された資源を活用し、暮らしの再建をあと押しする活動を始めた。

大槌町の全面積の9割は森林で覆われており、そのうち7割は漁師の所有する里山だ。豊かな漁場は、ミネラルを含む里山からの水の流れも影響している。漁師が代々山を引き継いできたが、住民の高齢化に震災が追い打ちをかけ、手入れする担い手不足のまま、津波塩害林の里山になっていった。

そこで、吉里吉里国は山の所有者にかけ合い、里山の整備として間伐作業を行い、副業づくりとして間伐材を利用した薪を生産。販路を築き、継続的な薪の生産事業を行ってきた。暮らしの再建や地域産業の復活に向けた力が込められた薪は、「復活の薪」と名づけられ、その販路は全国規模と なっている。災害支援でのさまざまなつながりが、事業への共感と販路の開

拓に結びついたのだ。

薪のある暮らしを見直す

「林業は、50年、100年単位の仕事です。いま切っている木は、50年前の先人たちが植えたもので、その恩恵を受けています。だから、50年後を見据え、山を育てていくことが大事です」と芳賀さん。里山の自然を守っていくには、継続的な維持管理する仕組みや人材が不可欠だ。全国的にも、継続的な林業従事者の確保や里山の管理運営体制には課題が多く、圏域の関係機関と連携して進める必要があるという。

吉里吉里国では、全国からの企業研修や視察団、薪割ボランティアなど年間約1500人を受け入れ、里山の暮らし体験や林業への関心を喚起する活動を行っている。後継者を育てる林業学校では、里山の自然環境や循環型エネルギーの話をし、林業を知る機会

を提供し、実技講習も行う。学校がきっかけで、山の手入れに関心を持つ参加者も出てきた。

豊かな里山を継続するため、里山や自然のある暮らしを身近に体験してもらおう機会も設けている。毎年秋には、薪まつりを開催。テーマは、「少々の不便さを楽しみ、心豊かに暮らすために薪と親しもう」。薪割り体験や薪オーブンで焼いたピザの振る舞い、専門家の講話などを実施。地域や近隣市町村からも来場があり、年々参加者も増えている。さらに、地域の小学校と連携して、森林教室を年3回開催。冬の木の芽観察、木こりや薪割体験など、実体験を伴う授業で、子どもたちに里山の楽しさ、厳しさを伝えている。「私たち山の仕事は、先人の恩恵を受けています。そして、これからの子どもたちにその恩をつないでいくことが大事なことなのです」と芳賀さんは、こやかに力強く語った。

十文字学園女子大学 教育担当副学長 人間生活学部人間福祉学科教授
次世代教育推進機構 ボランティアセンター長

佐藤 陽 (さとう・あきら) さん

日本社会事業大学大学院社会学部社会学研究科博士前期課程修了。市社協福祉活動専門員、市保健福祉部地域福祉係主任を経て、現職。専門は、地域福祉、福祉教育、ボランティア・ソーシャルワーク。学生時代に創設した障害児者余暇活動支援ボランティアを現在も学生とともに続け、大学と連携する自治体を中心に、社協や施設、NPO等さまざまな団体の活動を支援。多様な専門職と地域福祉実践者による学びを実践に紡ぐプラットフォームを実施している。



専門家に聞く地域づくりのヒント

地域の資源を活かし、
助け合い、つながり、
新たな産業を生みだす

地域づくりは人づくり

震災を契機に産業を興し、人と地域のつながりを創出して地域づくりに取り組む3つの営み(事例)から、厳しい自然のなかでさまざまな人とともに生きいきと生きている芳賀さん、阿部さん、徳水さんのあり方から、復興支援や地域づくりは国や自治体の力だけではなく、地域で暮らす人たちが立ちあがってつくることができる、「地域づくりは人づくり」であることが強く伝わってきた。

暮らしと産業を興す歩みとともにある地域づくり

いずれの営みも自分たちが生きる地域にしっかり根っこ(基盤)をもち、周りの人と助け合い、互いを生かし合うことを基本に、夢や希望を抱き、次世代に継続的に発展するよう取り組まれている。暮らしを支える産業を興し、人と人とのつながりと地域が育まれるためには、身近な自然の恵みを循環して活かす営みがたいせつであることがわかった。

「吉里吉里国」は、先人が守ってきた里山や自然の恩恵を受け継ぎ、地域産業の復活に役立て、そのご恩を子どもたちにつないでいる。「浜人」は、資源を共有し相互に助け合い、年上のものづくりの考え方と若者の柔軟な運営ビジョンを活かし、6次産業化につないでいる。「雄勝花物語」は、庭園を人が集い寄り添う場にして、さまざまな団体とつながりながら、新たな特産品づくりから人口減少の地域課題の解決につなげようとしている。

次代の担い手に伝える学校教育の活用と 地域資源を活かした6次産業化

「吉里吉里国」と「浜人」は、学校教育に協力して次代を担う子どもたちに伝えている。今日、地域人材と連携・協働して「地域とともにある学校」が進められ、自己肯定感、道徳観、正義感が高められる自然や生活体験活動の充実が求められている。地域づくりに人づくりは欠かせず、3つの営みの自然体験を学校教育に活かすことは、人間形成と後継者育成に役立つ。また、「浜人」と「雄勝花物語」は、「6次産業化」の定着を目指し、同業者や関係団体等と協働し、資金調達とともに法人化して、ブランド化、コスト削減、収入の安定、雇用創出に取り組んでいる。この定着には、すでに実践されているが、人と地域資源をつなぐ担い手が重要で、地域に広げられるように、関係団体等との対等な立場での連携が必要になるだろう。

農林水産業とともに育つためには自分たちの地域からはじめる

このように農林水産業とともに育つためには、さまざまな人たちと助け合いながら、自然による豊かな地域資源を活かし、「互いに与え合う姿勢」を育みながら、人と社会とのつながりを深め広げながら、循環する新たな産業を生みだすこと(創造)がたいせつで、こうした営みを自分たちの暮らし地域で人々とともに歩みながらつくること(地域づくり)を3つの営みが教えてくれた。

まじわる！
集団移転 & 災害公営住宅
 第34回

震災前からの住民と 転入者の交流の場

ございんの会
 (宮城県亶理町)



それぞれが工夫し、協力して作品づくり

宮城県亶理町の箱根田東地区には、東日本大震災以前からそこに暮らしている136世帯に加え、震災後に建てられた戸建ての災害公営住宅の入居者27世帯、防災集団移転による転入者28世帯が生活している。あちこちから集まった人たちが交流できるようと、毎月最終月曜日の10時〜12時に、集会所でお茶飲みが開かれている。会の名は「ございんの会」。

「いん」は、宮城県の方言で「来てください」「いらっしやい」という意味だ。

参加者は、同地区の災害公営住宅入居者が4人、防災集団移転者が5人、地域の住民が6人集まる。紙を使った籠づくり、鍋敷きづくりなどをしながら、お茶を飲み、談笑する。茶・菓子代は準備の際に立て替えておき、後日、町社会福祉協議会が助成するようになっている。小物づくりにかかる費用は、その都度、準備物に合わせて参加者が経費を払う。

参加者には、震災前と同じ地区に住んでいたものの会話するほどの関係ではなかった人たちもいれば、仮設住宅の生活で仲が深まっていた人たちもいるし、この地区に移り住むまでまったく面識がなかった人たちも混ざり合っている。互いに作業を手伝ったり、教え合ったり、冗談を言って笑い合ったり、にぎやかに過ごす。

「昔と違って、立ち話や、家を行き来してのお



毎月の楽しみで、会話も盛りあがる

茶飲みはなくなってしまう」「家でぼーっとしていたつてつまらない」「人間は1人じゃ生きていけないから、こうして皆に世話になって生きていくの」。参加者もこの会があるよろこびを口にしている。この会だけのつきあいでもなく、ほかの時間に自宅などでお茶飲みをする人たちもいる。

この会は、2016年5月と7月に町社協が開催したサロンから、運営の担い手を地域住民に引き継いで続けられているものだ。運営役を募る社協の呼びかけに応えたのが、現在、準備や運営を担当している小齋恭代さん。元民生・児童委員で、町社協とつながりがある

たこともあり、そのサロンに参加していた。

保育士の経験をもち、小ものづくりのノウハウをもちあわせていたことや、たまたま生活のなかで時間に余裕ができた時期だったことも小齋さんへと押し出した。「あちこちから移って来た人たちが集まる機会はないせつだし、自分が力になれることがあれば」と手をあげた。

会の名は、サロンに集まっていた皆で話し合って決め、はじめの半年間は地区内に回覧板でも広報した。参加者が自宅で作業することもできるように、折り紙などの簡単な材料のできるものづくりを小齋さんが紹介している。

小齋さんは、「移り住んできてひとり暮らしをしている人など、もっと多くの人に来てもらいたい」と思いを語る。震災当時住んでいた地域がばらばらでも、住民同士がつながりをもち、気にかける地域づくりが進められていく。



「家族が増えた」「助けるなかで助けられた」 — 仮設住宅の暮らしの声を聞く —

2018年6月30日時点で、女川町内の応急仮設住宅（プレハブ仮設）には、78戸38世帯97人が暮らす。町内外の借上げ賃貸住宅（みなし仮設）には、47世帯92人が住む（町外避難者もふくむ）（町民生活課しらべ）。18年4月以降、防犯や「コミュニティ維持への懸念から、町民野球場応急仮設住宅のみを20年3月までの特定延長として、集約化が進められている。住宅整備や土地区画整理の工期の関係から、供与期間内に退去できない世帯が特定延長の対象とされる。18年4月以前からも、入居者が減った団地は転居・解体が行われており、現在、野球場仮設には約40戸の住民が生活している。

「思い出が詰まった」

仮設生活

遠藤さく子さん（75歳）は、新田仮設住宅から町民野球場仮設住宅に今年3月に転居してきた。自立再建に向けて、来年の土地引き渡し、そして住宅完成まで、仮設住宅での生活を続ける。

絆は、ともに過ごす時間を重ね、育まれてきた。特に、住民が自主的に開いてきたお茶会は、手芸に親しみ、思い出話に花を咲かせ、交流を深める場であった。当時の自治会長など、住民のまとめ役の存在も大きかった。支援団体の手厚い援助もあった。

現在の野球場仮設では、住民同士のつき合いは希薄だという。入居者が減ったことや役員も日中仕事があることから、自治会活動がままならず、集会所もほと

んど使われていない。移動販売車での買い物の中に世間話をする光景は、時折見られる。遠藤さんは、「家族連れの若い世代が多いようです。『もうすぐ出る』『本当の家じゃない』『交流は必要ない』気持ちが強いのでは」という印象を受けている。「山の上で少し寒い」といった環境の変化や住宅の老朽化にもとまどいを覚えている。

そうしたなか、遠藤さんは、5月から、町社会福祉協議会の協力も得て、町の広報の全戸配付を始めた。広報は集会所に一括で届いていたが、新しく越してきて知らない人もいた。そこで、配って回ったところ、「ありがとう」と玄関先に出てきてくれる人もいて、互いに顔見知りになる機会にもなった。ほかに、町社協は、野球場仮設の自治会の相談を受け、ボランティア

を派遣して清掃を実施するなど、状況を確認し合える関係に住民と保っている。

現在の遠藤さんは、ぱんぷきん株式会社介護予防教室パートスタッフとして働き、それ以外の日は散歩などをして過ごす。同社は、町から被災者支援事業の委託を受け、仮設住宅に「ここからからだの支援員（ここから支援員）」を配置していた民間団体のひとつだ。支援員は、応急仮設やみなし仮設、地域で、見守りや健康体操、レクリエーションによる交流創出などを手がけてきた。同社は、互助形成を視野に地域住民もスタッフとして雇用。専門職である支援員とともに活動してきた。いまは、町から介護予防の事業委託を受け、町の中心部のほか離半島部の地区を訪ね、介護予防運動「ふまねっと」を推進する。訪問先では「健

康や脳トレにいい」「友人ができた」と好評だ。新田仮設の頃から働く遠藤さんも、担い手としてやりがいを感じている。震災を機に「支援を受けてきて、『何でもできることはやらなきゃ』と思った」と心境の変化があった。そうして、遠藤さんは前向きに日々を送りながらも、「やはり早く来年になって落ち着きたい」気持ちでいる。

今度、半年ぶりに開かれる新田仮設の元住民たちのお茶会を、遠藤さんは待ちわびている。料理の得意な人が「手料理を差し入れるよ」と話したり、運転できる人が離れて住む人を迎えるに行くからと申し出てくれたりと、自然に助け合えるよい関係が続いている。

仮設住宅はずっと住み続けられるところではない。生活の不便さや落ち着かない不安はある。それでも、

そこから生まれた絆や思い出が、いまでも心の支えになっている人たちもいる。

仮設住宅に通った日々

民生・児童委員（以下民生委員）の木村佳代子さん（69歳）も、仮設住宅の頃をつなぐ「いい出会いをいっぱいもらった」とたいせつに思い返すひとりだ。自身もみなし仮設に暮らしながら、今年3月まで女川町仮設住宅（内田地区）と女川町仮設住宅（蟹田地区）に通って、見守り訪問やお茶会運営に尽力した。はじめて会う住民が大半だったが、何度も顔を出して、関係を築いてきた。「自分も皆と同じ被災

者でスーッと思いを分かち合えた。たいへんな思いをしているんじゃないかって。話を聞くことで力になれたら、皆と笑って暮らせたら、と思っていました」。

内田・蟹田仮設では、合同のお茶会を開いていた。手料理を持ち寄って、親交を深め、町社協が町内外団体との仲介役となり、体操などの催しを企画。地域包括支援センターが、遊びながらリハビリを行える介護予防教室「遊びりテーション」も実施していた。

ある時、仮設住宅に住む高齢者の「津波で親戚も皆離れて遠いところにいるけれど、ここにたくさんさんの親戚ができた」という話を聞いた木村さんは、「ああ、この地区は大丈夫だ」と実感できた。体調が悪い人を気にかけ合うような関係もできてきた。退去後も連絡を取り合う人たちもいる。

今年一月からは、移住先が決まらない人を木村さんは気にかけてきた。「知って」いる人がいる仮設がいい」という住民には、「新しい生活を始めたほうがいい。（災

害公営住宅など）行く場所が決まったら、そこが落ち着いて暮らせるところだから」と声をかけた。その後、無事移住先が決まってよろこぶ様子を見た時は、安心したという。

木村さんは、いま、自立再建をして、女川北区の民生委員として災害公営住宅などを見守り訪問する。足繁く通って寄り添い、相談があれば地域包括支援センターなどにつないでいる。

木村さんは、震災前年の12月に民生委員に就任したばかりだった。「いま私が民生委員としてやっていけているのも、仮設住宅の人たちから教えていただいたことが大きいです。それは、その人の人生経験や人とのつながりのもち方、誠意をもって親身に聞けば相手も受け入れてくれることなどでした。拒まないで私を受け入れてくれたのがうれしかった。皆から力をもらっていた。皆の助け合いで仮設住宅はできていたと思うんです」。仮設住宅で受け取ったものをまた新たな力に変えて、次につなげている。



新田仮設住宅でのお茶会の思い出の一枚（前列中央が遠藤きく子さん）

仮設住宅支援のいま

今年3月で、町内の集合型の災害公営住宅計561戸、一戸建て型の集合住宅計298戸が完成。町の被災者支援事業「こころとからだくらしの相談センター」も17年度で終了した。

4月から、町主催の「こころ支援事業（被災者生活支援事業）」として、震災ころのケア・ネットワークみやぎに委託して、仮設住宅に残る住民を支援する仕組みが新たに作られた。臨床心理士が、応急仮設やみなし仮設、災害公営住宅を訪問して心のケアを行う。委託元である町の健康福祉課の保健師の佐藤由理さんは、支援目標を次のように語る。「住民が取り残された気持ちにならないように、実態を把握して一人ひとりに必要とされる見

守りを行います。地域関係者とのエリア会議で情報を共有し、新しいところに移っても大丈夫のように、地域の見守り体制につなげたい」。

復興の先も見据えた今後の町の方向性について、同課の保健師の三浦ひとみさんはこう話す。「一人ひとりが地域で安心して暮らし続けるためには、自分が住む地域のなかで関係性をもつことと、震災前からの地域資源である民生委員や区長などに役割を担っていただくことがたいせつです。17年度中に、相談センターから、地域の区長や民生委員、社協、地域包括支援センターなどに引き継ぎを行います。いまは地域の支え合い体制づくりを進めています。地域移行の一環として、町社協や生活支援コーディネーターが、住民の集い場づくりを後方支援している。「仮設の時のように集まりたい」という声も出て、新規の集い場もつくられた。

女川町で暮らす一人ひとりが主役となって、被災体験を支え合いのまちづくりへ生かしていく。



町民野球場応急仮設住宅

どごごでもサロン

第12回

自然なつながりと支え合いを生み出す



フキでも町も元気に

音別ふき路団

北海道釧路市音別町

北海道では、背丈が2倍ほどに成長するフキが各地に自生する。釧路市音別町は、食感が良く風味も豊かなフキが育つことで有名。ところが近年、自生フキが減少、枯渇も懸念される。

そこで、良質なフキを畑で栽培、保護しながら生鮮品や加工用などとして出荷し、産業振興や雇用創出への波及も狙う住民主体の取り組みが始まった。

引退した元農家・酪農家の知恵と経験を生かし、繁忙期には生活困窮者や生きづらさを抱えた若者を積極的に雇い入れ、就労支援や高齢者の活躍の場づくり、住民同士のつながりづくりにも役立っている。

この活動の中心にしているのが、小さなカフェレストランの店主。海に近いJR音別駅から内陸へ9キロほど入った酪農地帯に、土日のみ営業の「カフェさつき晴れ」がある。自前の野菜や豚などを素材に使った料理が人気だ。店主の伊藤まりさん（64歳）は、看護師として病院や看護学校に長年勤務したあと、3年ほど前にこの地に移住、店を構えた。「豊かな自然と美しい景観に魅せられた」。

一方で、「人口流出と高齢化で地域の衰退が止まらない」という厳しい現実も目の当たりに。合併前の旧音別町は、かつて炭鉱で栄え、人口はピーク時1万人を超えた。今年5月末時点では1833人。高齢化率は38・1%に達する。

伊藤さんは近隣の住民と話し合いを重ね、「音別のフキを使って人と町を元気にしよう」との合意に至った。

そして昨年5月、60〜70歳代の元酪農家4人と一般社団法人音別ふき路団を設立。代表に就任した。団は周辺の遊休農地約3・3ヘクタールを借り、フキ栽培に着手。販路形成を進めつつ新たな加工品や料理の開発にも挑戦する。フキ畑を観光農園とし、刈り取りや調理、「フキ迷路」を楽しんでもらう構想も。

団のメンバーは、日々畑仕事や出荷作業に汗を流す。月一度は会議を開くほか、ときには飲み会や焼き肉パーティーを催す。メンバーの一人、佐藤正光さん（64歳）は、「仲間と一緒に働いて、話をするのは楽しい。健康にもいいと思う」と語る。団の活動を軌道に乗せようと



知恵を絞り、体を動かし、その楽しさを共有する。それが人と地域を元気づける。お金も少し稼げる。これほど参加しがいのある「サロン活動」はない。木



素敵な笑顔の世一しず子さん（左）と小林きしさん（右）。仲良しさんのおうちサロンは笑顔が花開く



仲良し4人組が冬の間につどい合い、
温かなつながりを育むおうちサロン 滋賀県米原市

滋賀県と岐阜県の県境にある伊吹山は、日本書紀にもその名を刻まれ、積雪量のギネス記録を保持する。そのふもとに位置する曲谷地区は、JR 東海道線の近江長岡駅より車で約25分。この地区に、冬の間、1週間に1回程度、それぞれの家を行き来している4人組の女性がいる。

取材にお招きいただいたのは、石崎きり江さん（84歳）のお宅だ。集まる時間は、特に決まっていない。朝からお昼頃までのときもあるし、お昼を過ぎてから夕方頃までのときもある。

石崎さん、世代とめえさん（89歳）、世一しず子さん（87歳）、小林きしさん（85歳）の仲良し4人組が、それぞれの自宅を行き来する「おうちサロン」を始めたのは、1年前の冬の時期から。月1回の地区サロンにも参加をしているが、「冬場はやるのがなくて、退屈ではないね」「じゃあ寄せてもらおうか」「あがらせてもらってばかりじゃ悪いから、次はうちに」と集まるようになった。この日集まった石崎さんの家までは、1000、200m。ゆつくり歩いたり、手押し車を使ったりと、それぞれのペースで集まる。

「冬以外は、忙しいのよ。春はフキをとったり、山椒の実をとったり。夏も秋も畑が忙しくてね」「7月と秋は、集落の人と姉川ダムの周辺の草刈りの仕事に行っている。みんなでおしゃべりしながら楽しんでるよ」。生きいきと、そして顔を輝かせて話してくれる。

この地区で民生・児童委員を務める伊東京子さんは、2014年に曲谷に移住し、健康推進員や福祉委員も務める。こうしたつどいにも「できる限り邪魔していません」と顔をほころばせる。

自家製の干しいもと干し柿をふるまうのは、世代さん。素朴な甘みがうれしくて、ついでに一口、と手が伸びる。「昔から柿や芋をつくっておやつにしていたよ」と笑う。

穏やかな時間の流れと包み込んでくれる笑顔があふれる、心地よいおうちサロン。はじめて伺ったのに実家の

のように迎え入れてくれた場所。また、忘れられない人たちに出会えた。



お招きいただいた岩崎きり江さん(左)と、手づくりの干しいもをふるまってくれた世代とめえさん



過疎地で暮らしを彩る住民自治 (前編)



会長の辻駒健二さん



川根振興協議会（広島県安芸高田市）



広島県安芸高田市の最北部に位置する川根地区は、林野が8割を占める中山間地である。1945年頃に約2千人だった人口は、現在約4分の1になった。

過疎化がすすむ川根地区が、全国から注目されるようになったのは、統合で閉じた中学校の跡地を利用した「エコミュージアム川根」の存在だ。研修宿泊施設として、行政と住民が出資して1992年より運営している。交流人口が増え、地区住民の就労の場ともなっている。これらの地域活性の取り組みを推進するのが、住民自治組織の「川根振興協議会」だ。

集中豪雨被害を 救う助け合い

川根振興協議会は、昭和40年代からの深刻な過疎化に対し、地域住民が主体的に地域づくりに取り組みむことが必要という危機感から、1972（昭和47）年2月に発足した。

その直後の同年7月、集中豪雨の被害を受ける。陸の孤島と化した集落を救ったのは、住民同士の助け合いだった。住民自ら援助班を編成し、災害復旧活動にあたった。この経験が地域の結束を強め、暮らしの基盤となるさまざまなサービスが採算性を理由に撤退するなか、住民同士で議論を重ね、新しい住民サービスを生み出してきた。

たとえば2000年、地区唯一の農協の商業施設が撤退を決めたときには、地区内でガソリンや食料品、日用品が購入できないのは深刻な地域課題だとして議論を重ねた。最終的に、ガソリンスタンド「油屋」と商店「万屋」を地域住民で運営することにし、農協から土地・建物の有償譲渡を決めた。

また、川根地区から安芸高田市本庁まで車で40分、タクシーだと片道7千円かかるため、移動手段について行政と協議を行い、2009年から

市町村運営有償運送事業「かわねもやい便」を開始。通学・通院、地区内で行われるサロンへの送迎などを住民が担う。あわせて、「万屋」に買いに来られない人を対象に移動販売も始めた。

過疎地だからとあきらめるのか？

川根地区の住民自治からは、地域課題をどうにか打破したいという熱い思いが伝わってくる。「過疎地だからとあきらめて住み続けるのか。川根を離れる人もいるが、それがいい・悪いという議論ではなく、年に1度は川根に戻ってきてもいいように、住んでくれる人が考えて行動する」「幸せは税金だけでつくれない。自分たちでつくるもの」と会長の辻駒健二さん（74歳）は話す。川根地区の地域課題は、東日本大震災の沿岸部にも通じる。次回も、川根地区の攻めのまちづくりの取り組みを紹介する。小



ガソリンスタンド「油屋」と商店「万屋」



宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

老いたワーカーからの遺言(その4)

暑い夏、暑さに弱いので寝付けず、つい時代小説を片手に冷たいビール。専門書は片手では持てないので読めない(両手で読むとビールが持てない)。時代小説と言っても、戦国武将等の歴史に名を遺す御仁の話は読まない。

理由は特にないが、読む必要もないと勝手に思う。経営者やトップマネジャーの方が読めばよいので、名もないワーカーには関係なくて、もっぱら市井の人々の世話話や下級武士の「矜持」を伝える小説に心が動く。

かなり前に、たそがれ清兵衛という映画がありました。宮沢りえさんの美しさに見惚れていた私ですが、清兵衛のように上役から無理難題を押し付けられる様に、どこかサラリーマン悲哀を感じたものです。

どこにもいる冴えない中年社員。自分に重ねて、剣の達人でもないし、りえさんのような凛とした女性には惚れられないかもしれないが、自分らしいと思える生き方を求めていることに共感した。何よりも愛すべき人たちに寄り添い、苦楽をともにしていくことに至上のよろこびを持つ。私だって、そう思う！

私にとって、事例検討の場は映画を観ることであり、藤沢周平を読むことなのだと思う。大学で福祉の各分野の専門性を学ぶにしても、たこつぼ化したなかに埋没するような専門性に意味はあまり感じない。その点、山田洋次さんの映画は、人とのかわりにおいてたいせつなことを気づかせてくれます。人の気持ちを輪切りにしたがる心理屋には到底及ばぬ世界。

藤沢周平の「蝉しぐれ」、下級武士の青春を描く。若きワーカーの指針になることでしょう。

狭い福祉の専門性をジェネリックに膨らましてくれる映画があります。自らを過小評価し、委縮するワーカーに、自信を持つために必要な歩みを教えてくれる小説があります。

いずれも、自分で探し、選択することで手にすることができます。そのために必要な見識を皆さんはすでにお持ちのはずです。ということで、今回は少々気取って書いてしまいました。次回は、大いにくだけです。ご覚悟を！

ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所
アドバイザー 浜上 章



ふるさと 故郷への帰途

ここ数年、何度もよく似た夢を見る。ひとりでどこかに出かけている。その内“帰ろう”として、電車であったりバスに乗ろうとするが、最終便は出たあとらしくその場に佇む。あるいは、どこか山の方へ向かう坂道を歩いているが、いつも目指す場所に到着することなく途上で夢から覚める。つい先日見た夢は、ある女性と並んで楽しく歩いている。坂道を上っていると目の前に4～5段の梯子段が現れた。私が少し押しあげる形で女性が先に登った。私はそのあとで登ろうとするが、どこか不安を感じてとまどっている、そこで目が覚めた。夢のなかで私がどこへ向かおうとしているのか、わからない。こうした夢は、ユング派夢分析の先生によると“生まれ出た故郷”へ帰ろうとしているとのこと。人生の後半になると“魂の故郷”に帰ろうとする夢をよく見るとのこと。

現実の生身の人間の故郷・・・生まれ故郷、幼いころに育ったところ、母なるところ、海や山、祭り、幼友達と遊んだ空き地や小川、言葉・・・

故郷をあとにして、50有余年。時に、ふと故郷を思う。私にとって故郷は、何も言わずに全てを受け入れてくれるところ。最近では親族の病氣見舞いなどの用事に乗じて、心配とどこか心弾ませて故郷への道を急ぐ。ふるさとの海に再会するとうれしくて泣きたくなる。久しぶりに親しい人たちとふれあう。短い滞在であるが、ふるさとで過ごしたわが身は心満たされ、いつの間にかエネルギーが充電されている。

震災で長年住み慣れた故郷を離れざるを得なかった多くの人たち。特に、福島原発被害で戻りたくても故郷に戻れない人たちの悲しみと無念さを思うと、本当に心が痛む。胸にはなつかしい故郷を抱きながら避難先で、集団移転地等新たな土地で心定めて“わが故郷”をつくっていくことになる。支援員さんたちは、被災者のそこの暮らしが新たな故郷になるべく寄り添っていく。いつかは誰もが本当の故郷：魂の故郷に帰っていくけれど、生身の人間でいる間にまた、心安らぐ“故郷”を持てることができたら幸いです。

平成30年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

<支援に関わるための基礎研修>

【仙台会場①】7月30日(月)～31日(火) 仙都会館

講師:永坂 美晴(兵庫県明石市社会福祉協議会 地域総合支援センター 地域支え合い推進担当係長)

岩城 和志(兵庫県淡路市社会福祉協議会 事務局次長)

<地域支え合い実践研修1 地域支え合いの発見の仕方>

【仙台会場】8月20日(月) エスポールみやぎ

講師:大坂 純(東北子ども福祉専門学院 副院長)

池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

木村 利浩(全国コミュニティライフサポートセンター 開発主査)

宮城県サポートセンター支援事務所

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-7-4 宮城県社会福祉会館3階 TEL 022-217-1617 FAX 022-217-1601



手づくりの麻雀卓を囲んで。男性の参加者が約7割と多いのが特徴だ

61回目

市民リレー

東北の元気

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

今回は...

潮風薫る松島で、第二の人生の嗜み

◎健康麻雀愛好会（宮城県松島町）



松島湾と260の島々が織りなす、日本三景の美しい眺めを誇る松島町。その沿岸にある磯崎地区では、指定避難所「長田避難所」を使って、定期的にカラオケや体操、将棋などの住民の集まりがもたれている。そのうちのひとつ「健康麻雀愛好会」は、始まって約一年。「賭けない、飲まない、吸わない」会は、女性や初心者にもやさしく、人気を集めている。月二回の開催日には、31人の会員が、午後1時から5時まで休憩を挟まずに（！）打ち続ける。定刻前から集まって打ち出す人もいるほどの熱中ぶりだ。「この日を指折り数えて待っている」「リフレッシュできる」「こういう場所があることは、いいことだよな」とよろこばれている。定年退職した人が主な参加者で、「皆さんとお会いしておしゃべりできるのが健康的」「脳トレにいいんじゃないですか」と健康増進にも役立つと評判だ。

ここで知り合って仲良くなる人々も多い。同じ卓になると、「うちどこですか?」「昔何を仕事されていたんですか?」から始まり、ふだんの生活のこと、健康のことなど話に花が咲く。毎回組み合わせが変わるので、いろいろな人と話せて、

地域の情報共有の機会にもなる。しばらく休んでいる人がいれば、「最近来ないねと心配になる」と互いに気にかけて合う。定期的な内部で大会を開き、旅行にも出かけるなど、交流を深めている。

民生・児童委員で会長の石垣俊彦さんと高橋匡則さんが会を結成した。認知症予防やふれあいの機会になり、男性でも気軽に参加できる活動をつくりたいというたつての願いがあった。開催に当たっては、地区地域福祉推進協議会（社協）に相談をし、仙台市の「麻雀定禅寺クラブ」の取り組みも参考にした。全戸にチラシを配って呼びかけ、試験的に開催したところ、望外に好評で、常設化して現在に至る。

DATA

健康麻雀愛好会

活動拠点：長田避難所
（宮城県宮城県松島町磯崎字長田68-4）
活動日：毎月第2・4月曜日
代表：石垣 俊彦
連絡先：022-354-5290

活動費には県共同募金会助成金や町の補助金を活用。町や町社協の職員も視察に訪れるなどして、住民主役のこの集まりを温かく見守っている。田

☆次号予告 特集「自宅を開放したサロン」

平成30年度 宮城県生活支援コーディネーター養成研修

<市町村担当者・受託団体上長研修>

【仙台会場】 8月2日（木） 仙都会館

講師：大坂 純（東北子ども福祉専門学院 副学院長）

高橋 誠一（東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授）

志水 田鶴子（仙台白百合女子大学 人間学部 准教授）

吉田 瑞穂（大分県中津市社会福祉協議会 地域福祉課 課長）

齋藤 理恵（福島県福島市飯坂南地域包括支援センター 所長）

池田 昌弘（全国コミュニティライフサポートセンター 理事長）

読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ（地域づくり）から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

69号を読んで、世のなかには自分の知らない地域がたくさんあり、さまざまな活動をしていることをこの情報紙で知ることができました。その地域でしかできない活動をしているまちや自ら考えて活動をしているまちなど、自分の知らない新たな世界が見え、ほかの地域の活動をもっと知りたいと思いました。また、記事を書いている方の書き方がそれぞれ違って、とても楽しく読むことができました。（福島県金山町 A・G）

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください！
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737
E-mail joho@clc-japan.com

編集後記

「生産者の顔の見える売り場って農産物にはよくありますが、海産物にはあまりありませんよね」と浜人の阿部勝太さんがお話されていました。産業の枠を超えたところにも、活動のヒントがあるのかもしれないですね。今回の特集は農林水産業について各一団体ずつ取りあげ、震災復興・産業再生・地域支え合いの面からアプローチしました。「こういうやり方もあるのか」と、産業や地域の枠を超え、活動や支え合いがさらに広がっていくことを願います。（田中）

